

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	古本 佳代
所属機関名	獣医学部 獣医保健看護学科
職位	教授
在籍年	7.5 年

教育の責任

獣医保健看護学科において、ライフサイエンス分野および獣医看護分野を中心に教育を担当している。担当科目は動物看護学概論（1 年生）、愛玩動物学（1 年生）、比較動物学（2 年生）、動物看護学関連の実習（2～3 年生）、実験動物学関連の実習（2～4 年生）、卒業研究（4 年生）などである。特に実験動物分野の科目を主に担い、実験動物技術者資格取得に向けた教育を通じて、動物福祉と科学的基盤を両立できる人材育成に取り組んでいる。

また、準正課活動「いきもの QOL」の運営にも携わり、学生の授業外での探究や地域連携の機会づくりを企画している。

教育の理念

理念の柱は、人と動物の関わりの中で形成される多様な動物観の理解である。縦に専門を深め、横に分野をつなぐ学びを重視する。分野や立場ごとに前提や関心は異なるため、ひとつの視点にとどまると視野が固定化し、新たな発見や解決の糸口が生まれにくい。そのため、「多様な価値観を行き来できる多角的視点」を重視する。

学生には多様な動物観を理解し、主観と客観を往復しながら事実を踏まえて考え、「課題を発見する力」、そして「課題から目を逸らさずに向き合い続ける力」を涵養させたい。専門の知識や技術の修得にとどまらず、他分野の知見を取り入れて比べ、つなぎ合わせ、倫理的視点と科学的根拠を両立させて現場課題に取り組む態度を育む。

教育の方法・方針

基礎から応用へと段階的に理解を深められるよう、講義と実習を設計している。低学年では広義の動物実験や動物福祉の概念を扱い、高学年ではより専門的な知識や技術を取り上げ、理論と実践を結び付けて理解を促すよう進めている。

学科カリキュラムで扱う知識や技術には、複数の分野に共通するものと分野特有のものがあるが、学生はしばしば区別してしまい、応用の可能性や関連性に気づきにくい。そこで、同じ知識や技術が異なる分野でも活用できることを意識させ、分野横断的に学ぶことで相乗効果を生むことを重視している。そのため、担当領域をライフサイエンス分野に限定せず、獣医看護分野の教育にも積極的に携わっている。これは教育理念で掲げる「多様な動物観の理解」や「分野を横断する学び」を具体化する実践であり、学生が複数の立場から物事を考えるきっかけとなるよう意図している。

また、ライフサイエンス分野での教育は資格試験対策と混同させず、正しく理解させることを学びの軸としている。一方で、高学年の実習では資格試験に直結する高度な技術内容も扱い、概念理解と技能修得の両輪で学修を支える。

講義課題には、国家試験や資格試験の過去問や類題を用いて要点の把握を促し、問いの意図を捉え、根拠を示して答える練習に用いている（試験対策を目的とせず、理解の定着を図る）。出席と毎回の課題提出を重視し、暗記に依存させず、自ら調べ、考える学習姿勢を重視している。

教育の成果

授業アンケートの結果から、理解度や満足度が高いことが確認できている。比較動物学（2025 年度、回答率 79.1%）では「分野への理解が深まった」83.0%、「満足～ほぼ満足」96.2%であった。実験動物学実習 A（2024 年度、回答率 96.7%）では「分野への理解が深まった」89.7%、「満足～ほぼ満足」96.6%であり、実験動物学実習 II（C）（2024 年度、回答率 100%）でも「分

野への理解が深まった」85.7%、「技能・技術が向上した」71.4%、「満足」100.0%と、いずれも肯定的な評価が得られている。

さらに、実験動物技術者資格試験においては、全国平均の合格率が30～40%と難関であるのに対し、本学科の学生はその2倍となる高い合格率を安定的に維持している。

今後の目標

今後の目標としては、まず課題の改良に取り組みたい。事前学習と授業理解の双方を評価できる形式へ改め、講義開始時に小テストなどで予習内容の確認、講義後の課題では授業内容にもとづく応用設問を配置して、学習過程を可視化したいと考えている。

また、VPP育成の強化（分野横断の視点）も重要な課題である。動物の看護の視点を備えた実験動物技術者、科学的視点を活かせる愛玩動物看護師など、複数の立場を行き来できる人材育成をより目指す。その実現には専門実習、プレゼミ、卒業研究といった高学年の総合的な教育の場が適していると考えている。これらを通じて分野横断的な視点と判断力を涵養する教育を展開し、さらに大学院進学へと接続することで、より高度な教育・研究を担う人材の育成につなげていきたい。

加えて、準正課活動「いきものQOL」の活動自体は直接的なVPP教育そのものではないが、多様な価値観を行き来できる多角的視点を身につけるうえで有効な活動であると考えている。現時点では成果の蓄積が十分でないが、今後はフィールドワーク中心の実践型プログラムとして整備したいと考えている。地域連携やSDGsの観点とも結び付けながら、活動を小規模から段階的に拡張していきたい。

根拠資料

2024年度、2025年度 授業評価アンケート

2022～2024年度 実験動物1級技術者試験結果